

大地を揺さぶる重低音で クラシック音楽を肌で感じる

C.C. Saint-Saens (1835-1921)
P.I. Tchaikovsky (1840-1893)
G.F.F. VERDI (1813-1901)

い つまでも心を休めたり、労わっているだけでは、自分自身が甘えて駄目になる。たとえ、総理がそうだからといって、真似をする必要はない。今回は、右脳をフルに使い闘争本能を刺激する。そして、いつもの受身をかなぐり捨てて、明日から「攻撃力」を身に着けよう。攻撃は最大の防御である。少々のことでは怯まない強靱な精神を作り、先輩方のダイナミズム(あつかましさ)を越えて欲しい。そこで、これぞクラシック音楽の最終兵器と思われる優れた録音の曲を選んだ。日曜日にはこれを聞いて月曜日から備える。ボリュームはあくまでも普通の位置、しかし、近所や周囲に音が漏れないよう窓を閉める。



ここで紹介しているような音楽をかけると、ライオン丸は飛び起きて、食事を平らげ、爪を研ぐ、更にもつくりをして、今から戦闘モードだ。

□C.C.サン・サーンス
交響曲 第3番 ハ短調 op.78
「ORGAN」



ハスケル社製 4段の鍵盤と93の音栓を持つ巨大なパイプオルガンとオーケストラが同時に演奏された大変珍しい録音(従来CDのほとんど

はオルガンを後からダビング)。今までの演奏では、最低音が聞こえないとか、空気感がないとか、重低音の迫力に乏しい物ばかりだったが、これこそ、さすがテラークサウンド。明確な違いを打ち出している。演奏は、ユージン・オーマンディー指揮、フィラデルフィア管弦楽団 場所は、聖フランシス教会。オルガンの超低音の音程感は素晴らしく、圧倒的な空気感、重低音の力強さがまるで違い、クラシック音楽の醍醐味を満喫できる決定版といえる。

録音は、テラーク独自の 방법으로直接音と間接音をたった3本のマイク(ショップス MK II)によって収集している。それでも、これだけ凄まじいダイナミックレンジの録音が出来ると驚く。

□P.I.チャイコフスキー
大序曲「1812年」op.49
イタリア奇想曲 op.45
コサックの踊り〜マゼッパより

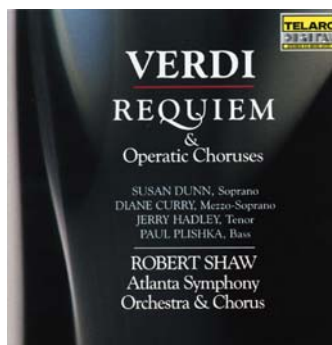


ロシア、1812年、大序曲とくると、この曲を知らない人でも、勝利記念の「勇ましい戦い」を称える曲だと推測できるだろう。しかし、そのスコアに、「大砲の音」という指定があることを知れば驚くに違いない。テラークは、これにも手をつけた。バージニアの古典兵器保存団体が所有する大砲が発射され、最後は4人の奏者で鳴らされる鐘の音で締めくくる。

大雪原を進軍してくるナポレオン率いるフランス軍に、平和な町や村を守るため、恐る恐る迎え撃つロシア軍の、それでも勇敢な戦いぶりが音楽に表現されている。背後から進

軍ラッパとも取れるファンファーレに後押しされながら、てこずる相手に、ひつこく何度も立ち向かい、少しずつ優勢になっていく様子は、チャイコフスキーならではのもの。最後には、力強く大砲の連射でフランス軍を追い払う。神のお導きに感謝し、教会の鐘の音で、勝利を祝う喜びに変わる。スピーカーを壊さないよう音量はやや低めに。大砲の音が凄い。

□G.F.F.ヴェルディ「レクイエム」
オペラ合唱曲集



宗教音楽、ミサ曲、死者を悼む曲、と侮ってはいけません。テラークの録音技術は素晴らしい臨場感を演出した。従来の「混変調ひずみ」気味の濁った録音とは全く違う。ソプラノ、テナー、バスが歌い上げるホールの響き、さらに、合唱の透明感は圧巻である。

このヴェルディのレクイエムで、最も聴きごたえのあるのが「怒りの日」のパートである(2箇所)。大太鼓のアタック音がリアルに収録されているにもかかわらず、ホール内に広がる低音の圧迫感は素晴らしい。金管楽器との音量バランスも申し分なく、このパートは特筆に値する。

怒りとは、どのように激しい心の動きか、これを聴くことでその本質を理解できるというもの。これだけのエネルギーを体に収めていられるはずはない。その音楽性に秘められた爆発力を感じて欲しい。

注)テラークのCDは現在でも入手可能。是非、一度これらのテラークサウンドを体験してみてください。元気が出ること受けあいた。凄いよー。